

降誕後主日

2024年12月29日

風のように

甘木教会



牧師：白川道生

委嘱者：竹田孝一

14 これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。 15 また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。 16 キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。 17 そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

コロサイ信徒への手紙3：14-17

【説教要旨】

激動の変化の一年、最後の礼拝です。私たちは戸惑いつつも生きていかなければならなかった時代に旅をし、一年を終わろうとしています。皆さんの2024年の旅はどうでしたか。

ヨセフとマリアは、人口調査のための旅から始まり、旅の途中にイエスさまが生まれ、主の天使のお告げを聞き危機を逃れてエジプトへ旅をいたします。二人の旅は決して自分の意志からの旅でなく、外からの強い圧力による強いられた旅でした。聖書にとって旅は大変重要なことです。旅はそこに神の意志があるのです。 **あなたがたはわたしと共にいる寄留者、また旅びとである。レビ記25:23**

神さは、神の民をこのように言います。

私たちは旅人である。しかし、孤独の旅人ではありません。「あなたがたはわたしと共にいる」と。クリスマス出来事に「主の天使が夢でヨセフに現れて言った。」とありますように、自分の旅において、神は共にいてくださり、神は現れ、導きを常に与えてくださいます。

激動期に私たちの人生、旅があります。しかし、たとえ厳しい、未来が見えない旅であっても「わたしは心に留める」と神は、私たちの人生に心を留めていてくださいます。私たちの旅は一人で自分の旅を方向づけるのではなく、「わたしは心に留める」という方、神によって導かれていくということを確認し、信頼することが私たちの人生の日々の一歩であるということです。

人生の旅が常に順調であるはずがありません。マリアとヨセフとに今、身の危険が迫り、幼子を抱きつつエジプトへと逃避しなければなりません。苦難の旅です。しかし、彼らだけが苦難のうちにあっただのではないのです。**彼らの苦難を常に御自分の苦難としてくださる神さまがいた**のです。私たちは一人では決してありません。

「足あと」という詩をご存知でしょう。

ある夜、わたしは夢を見た。

わたしは、主とともに、なぎさを歩いていた。

暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。どの光景にも砂の上にふたりのあしあとが残されていた。一つは私のあしあともう一つは主のあし跡あとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、

わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。

そこには一つのあしあとしかなかった。

わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。

このことがいつもわたしの心を乱していたので、

わたしはその悩みについて主にお尋ねした

「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、わたしと語り合ってくださいと約束されました。それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、ひとりのあしあとしかなかったのです。

いちばんあなたを必要としたときに、あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、わたしにはわかりません。」

主は、ささやかれた。

「わたしの大切な子よ。

わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。

あしあとがひとつだったとき、

わたしはあなたを背負って歩いていた。」

この詩のような私たちの人生は、神の愛、神が大切にしてくださるのです

愛された私たちにパウロは私たちに勧めます。「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。」。そうです。自分だけで生きるのではなく、たとえ厳しい時代であっても、自分を守るだけで精一杯の日々であっても、ヨセフとマリアの間に赤子のイエスさまがおられたように私たちの人生の旅においてイエス・キリストが居られたように、この私を愛されている主・イエス・キリストがいます。

私たちの人生を通して主の愛がますます明らかになるような人生の旅が信仰者の旅です。なによりも私たちの旅は、イエス・キリストがはっきりと示される尊い人生の旅であるという愛と恵みです。この一年の旅を感謝しつつ、主に背負われつつ、希望をもって、愛は、すべてを完成させるきずなですという2025年の旅へ共に歩いていきましょう。

牧師室の小窓からのぞいてみると



今年は大森の窓から甘木の窓になったが、急激な変化の一年は変わらずであったと思う。私が一番、悲しく感じたことは、多様性と多様性からくる対立である。インターネットは、世界は多様性に溢れたものであることを瞬時に教えたが、多様性を認め合うというベクトル以上にそれぞれの多様性を受け入れていかず相手を力でねじ伏せようとする国家、個人が互いに衝突を生んでいる。それが大国によるものであるということである。

異邦人である3人の博士に代表されるようにクリスマスは、神の救いは民族を越えてやってくることを示した。多様性の認知である。そこには争いでなく平和があった。



園長・瞑想？迷走記

先週、クリスマス・イブ礼拝、クリスマス・深夜礼拝に聖和幼稚園の卒園生がやってきた。その中に三代に渡って園に来た方もおられた。園の歴史を知る心温まる話になった。話を聞きながら、教会の方、保育者、関係職員が愛をもって一人ひとりに寄り添ってくださっていたという歴史でもあった。「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。」というパウロの言葉のように、「愛は、すべてを完成させるきずなです。」という愛による絆を感じるひと時であった。

現在は、経済を中心として動く社会がある。保育園、認定こども園の園児数は増え、幼稚園児数は30万人減少している。劇的に保育環境も変わり、子どもたちが一番、影響を受けている。私たちがどう向き合っていくかという大きな課題を突き付けられている。現場の保育者と課題を共有し、向き合い、どう保育をしていくかは緊急の課題で、園長の舵取りが問われている。

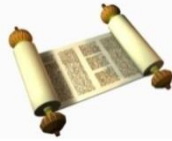
「愛は、すべてを完成させるきずなです。」というクリスマスにいただいた恵みのひと時であった。来年も愛の絆を切らさない活動をしようと思う気持ちをいただいた。

日毎の糧

主を讚美せよ。

主のみ名を讚美せよ。

詩篇 148



「ルターの言葉から」

そこで、私たちは、この世的に表面だけ好運なヘロデが、わたしたちから、まことの恵み深い王キリストを奪い去らないように努力をしなければなりません。キリストは貧しいみじめな幼子として、飼葉桶に横たわっておられますが、私たちは、この方のところに行かねばなりません。

それゆえに、もしまことの幸福を願い、純潔で幸いな良心をもち、欲するならば、ヘロデ王の生活方式を捨てて、もう一人の王キリストのものに行かねばなりません。

(『マルティン・ルター日々のみことば』鍋谷堯爾編訳 いのちのことば社)

主を讚美せよ

私たちは、神に造られた者であり、創造された神の命の中に生きている。私たちを取り囲む自然の中で私たち、特に日本人は何がおおすか分からないが私の存在と違うものが働いていると感じるのではないだろうか。しかし、この感性が失われつつもあるのも事実である。

「山々や丘に向かって、神を讚美せよ、と呼びかけるような感性は、すでにわれわれから失われて久しいのではないか。旧約聖書の創造信仰を語るキリスト教会においてさえ、そうした感性は忘れ去られてしまったかのように見える。本詩が現在の読者に投げかける問いかけがここにある。」(詩編の思想と信仰VI 月本照男 新教出版)

地球温暖化にしても「山々や丘に向かって、神を讚美せよ、と呼びかけるような感性」の欠如だと思ふ。今だからこそ、もつとこの感性を研ぎ澄ませたい。

祈り：主よ、あなたの創造を讚美出来る者と私たちを回復し、地球温暖化解決へ目を向けえますように。

甘木通信

今年も家内の協力をもらって、大森、聖和、日善幼稚園、松崎保育園の先生方にそれぞれ違った小さなクリスマスプレゼントをした。



その中で、絵本を送った幼稚園もあった。本を贈るという習慣は、私が高校生とき、門司教会の内野牧師から、本をいただいたことによる。洗礼のときは、「ローマ書講解に現れし ルッターの根本思想」。クリスマス時、「キリストにならいて」、鈴木正久牧師の「主の祈り」、「マルコ福音書講解」であった。そして、それぞれが、今の自分を支えている。本との出会いの大切さを教えてくれた人生の一コマであった。「ローマ書講解に現れし

ルッターの根本思想」は、佐藤繁彦牧師が京都帝国大学に提出した博士論文である。そんなものを神学の素養もない高校生の私にくださったということは無茶そのものである。しかし、後に卒業論文で「ローマ書講解に現れた ルターの間人観」という神学校卒業論文につながっていった。もし、ちんぷんかんぷんのこの本との出会いがなければルターにこだわる今日の私はないと思う。本棚のこの本



を見ながら、なぜこんな難しい本をプレゼントにくれたのか考えている。後に牧師生活も最後が近いと思い。大森でルターの「ローマ書講解」を聖書研究でみんなと読んだ。

(甘木日記)土) 明日のクリスマス礼拝に向けて準備。日) クリスマス礼拝と祝会。月) クリスマス礼拝、祝会で楽しい時間を過ごす。火) イブ礼拝の準備で甘木へ。イブ礼拝には聖和の卒園生が親子できてくださる。歴史の長さや園の尊さを感じる。水) 0時のクリスマス深夜礼拝にも卒園生の子どもが出席くださる。甘木宿泊。昼、久留米に帰り。家内と幼稚園の階段下の物置を片付ける。綺麗に整備されたが老夫婦は疲れる。早く寝る。木) 園の掃除。やっと年を過ごせそう。大森の卒園生に手紙を出し終える金) 2学期最後、少々、走りすぎ疲れを感じている。

おまけ・牧師のぐち (続日記) 牧師だって神さまの前でぐちります。ぐちらない聖人(牧師)もいますが。

土) 明日のクリスマスの祝会の重いリュックを背負って、電車に乗る。夜は足が冷えてくる。よくよく考えると一つの建物、場所の3階から一階という縦の立の空間で動いていたのが今は電車です。1時間という横の空間を移動している。これが出来るのもブラジルの20

数時間をかけて夫婦で移動していたおかげと思う。夏のクリスマスが思い出させる。日) 40人のクリスマス礼拝を迎える。松崎保育園、聖和幼稚園の先生方も出席くださる。聖和の先生には絵本、松崎の先生にT十字架をプレゼントする。よく子どもたちに寄り添って

いただく。祝会はインドネ



楽しい時間を過ごせる。家内

シアの青年も加わりがお菓子を作ってく

れて賑やかな食卓となったと

思う。月) 耳の後ろ

が痛く、耳鼻科に行く。たい

したことはないとい

うこと。火) 早朝保育を手伝

い、イブ礼拝の準備

に甘木に行く。家内がいる

(ブラジルの土のクリブ) いろと心づかいを

してくれる。ブラジル時代の宣教地を訪問し、礼拝をしに出かけた

時のように横に移動し二人で今日も重いリュックを背負う。違いは、

歳を二人とも取りすぎていることを笑いながら「早く歩きなさいよ」

と家内に叱られる。クリスマス・イブ礼拝の準備をするが、いつも

何か抜けている。歳である。後は運に任せるしかない。在園児、三

代に渡る親子の卒園児の方も来てくださる。在園児が可愛くクリス

マスソングを歌ってくれる。祝会が話で弾む。来年はヴィジュアル

を入れよう。Zoom参加者もおられる。水) 0時の深夜礼拝、誰も来

ないかと思ったが数名の方と守られた。卒園児の高校生が来てくれ

る。40年間、よくここまで深夜礼拝を続けてきたと我ながら感心

する。花壇に花を植えて、甘木から久留米に帰り、クリスマスのさ

さやかなお祝い、ランチを二人でとる。家内と幼稚園の階段下の倉

庫を掃除。どんどん出され、捨てなさいの一声で片付く。二人とも

よく動くは。無事に大森の卒園生に便りを書き終える。先に出した

手紙に返信がきて、嬉しい便りもある。木) 幼稚園の午前中は掃除。

預かりも終わり真っ暗な中を家に帰る。9時に就寝。金) 二学期最

最後の職員会議。そのためか、早朝にフィリピンの年長の園児に日本

語をどう教え、小学校に準備するかという夢で起きる。3時半。

(笑) 今日まで無事に主日の準備が出来た。ホット。